駆初（のりぞめ）

江戸にまで聞こえた、大名山内家の武家行事

長浜以来、幕末まで続く、大切な正月行事

土佐藩の正月の恒例行事の一つに、「駆初（のりぞめ）」という行事があります。この行事は、藩祖山内一豊が、豊臣秀吉より近江長浜に2万石を拝領し、城持ち大名となった翌年（天正14年［1586］）から始められた、山内家家臣団にとって大変重要な武家の行事です。長浜時代、その後の遠州掛川時代はもちろん、土佐入国後も江戸時代を通じて幕末まで継続された行事です。

郭中本町筋を疾走する騎馬武者

この行事は、毎年正月11日に、城下郭中の本町筋（現在の電車通り）で行われました。現在のグランド通交差点付近（「乗出」）から堀詰付近（「乗廻」）まで約900メートルの距離を、家臣が武装して馬に乗り、それぞれの家の旗指物などを掲げて疾走するものです。

藩主と家臣の関係を行事で確認

駆初は、年の初めに行われる武家の行事らしく、藩主と家臣たちとの主従関係ならびに藩の家臣団の体系を再確認するような行事でした。藩主は、御城の南門前にある筆頭家老深尾家の屋敷の御櫓（現在の高知電気ビルの場所）から、家老の組ごとに編成され疾走する騎馬武者を観覧し、家臣たちは藩主の前で自分の家の出陣姿を披露する、そのような性格の行事でした。

出陣を意識した臨戦体制の演出

本町筋の通りの両側には、各所に担当役人が配置され、また藩主がいる御櫓前を中心に、兜立・長刀・十文字槍・笹型槍・馬験・床几など、まさに臨戦体制を表現するような諸道具が並べられていました。特に、御櫓前に立てられた「無」字の幟旗は、慶長5年（1600）一豊が徳川家康に従い会津征伐に出陣する際に、掛川城下の真如寺の在川和尚より授けられたもので、一豊はその後、関ヶ原の戦いを経て、土佐一国を拝領するというように、山内家発展の象徴ともいえる出陣の幟旗でした。

江戸にまで聞こえた「天下に並びなき」行事

元禄年間（1688-1704）に駆初を見た江戸の文人斎藤唱水は、その感想を次のように記しています。「甲冑を帯し、馬上にて、家々の旗指物、また母衣をかけ、一騎ずつ出で列なるは、八町あまりの屋形筋なり。朝より夕に至るまで、引きもきらず、千騎に及びて出る装い、かねがね江戸にて聞き及びしこの事、天下並びなき壮観たり」。城下を舞台に行われる、江戸にまで聞こえた大名山内家の行事でした。

描かれた駒初の風景1

土佐年中行事絵巻（高知県立図書館蔵）より

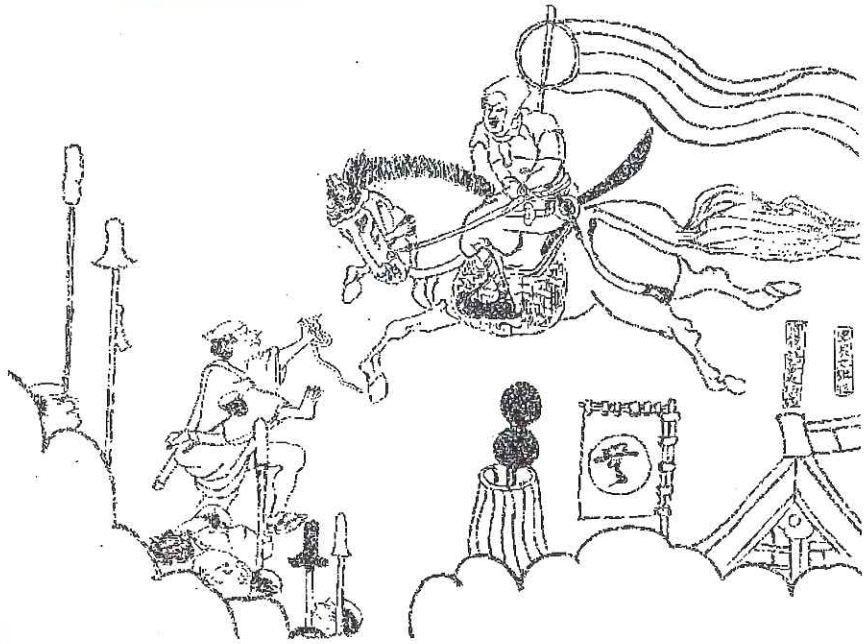
正月十一日
十一日、御乗初、一老乗馬ノ体

正月十一日　其三
諸士乗馬ノ体、
赤面ハ生駒家珍蔵ノ由、
曽テ郷士苅谷某異形ヲ好ム、コレニ近シ

正月十一日　其二
此吹抜キ指物ハ、特命ニ出ルモノ、名誉タリ

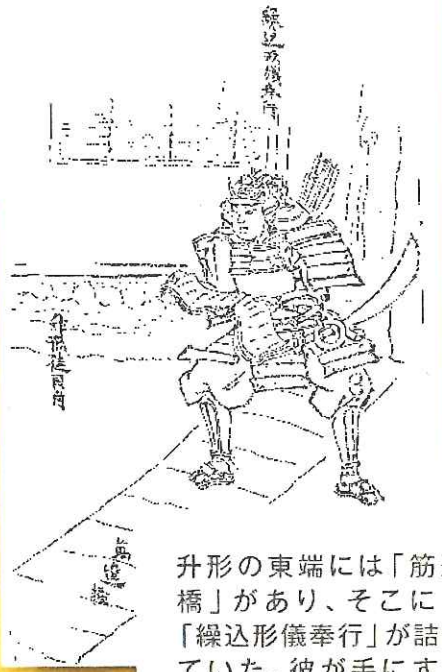
描かれた駆初の風景2

『皆山集』第4巻所収、駆初関係図より



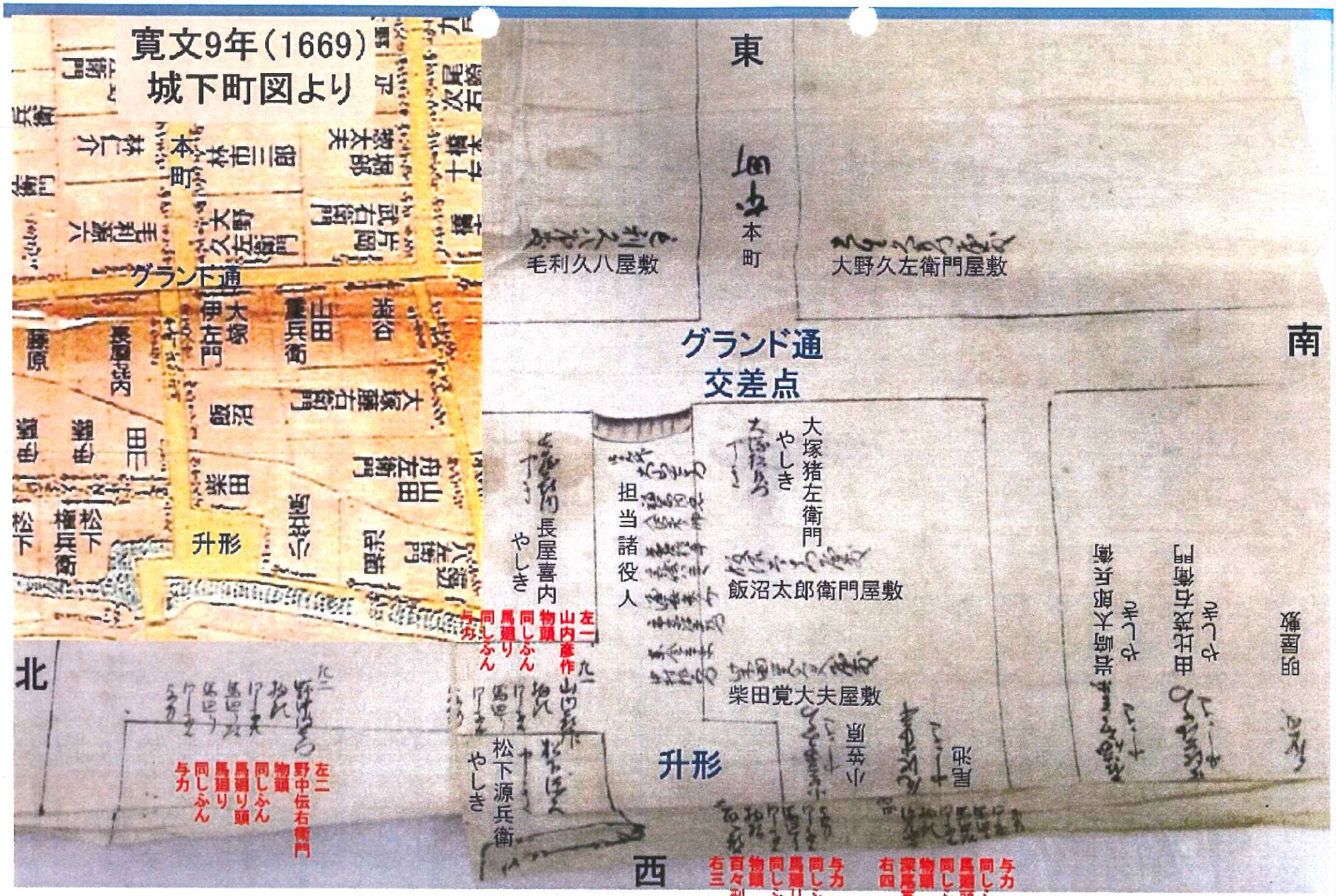
筆頭家老深尾家の屋敷の南側（現在の高知電気ビルの電車通り側）には、藩主が駆初を見学するための「御櫓」があった。その前には「無」の馬印を立てるのが通例となっていたが、これは一豊ゆかりのものである。

描かれた
騎馬武者の姿



升形の東端には「筋違橋」があり、そこには「繰込形儀奉行」が詰めていた。彼が手にする帳面には、駆初に参加する武士の名前が書かれていたのであろう。

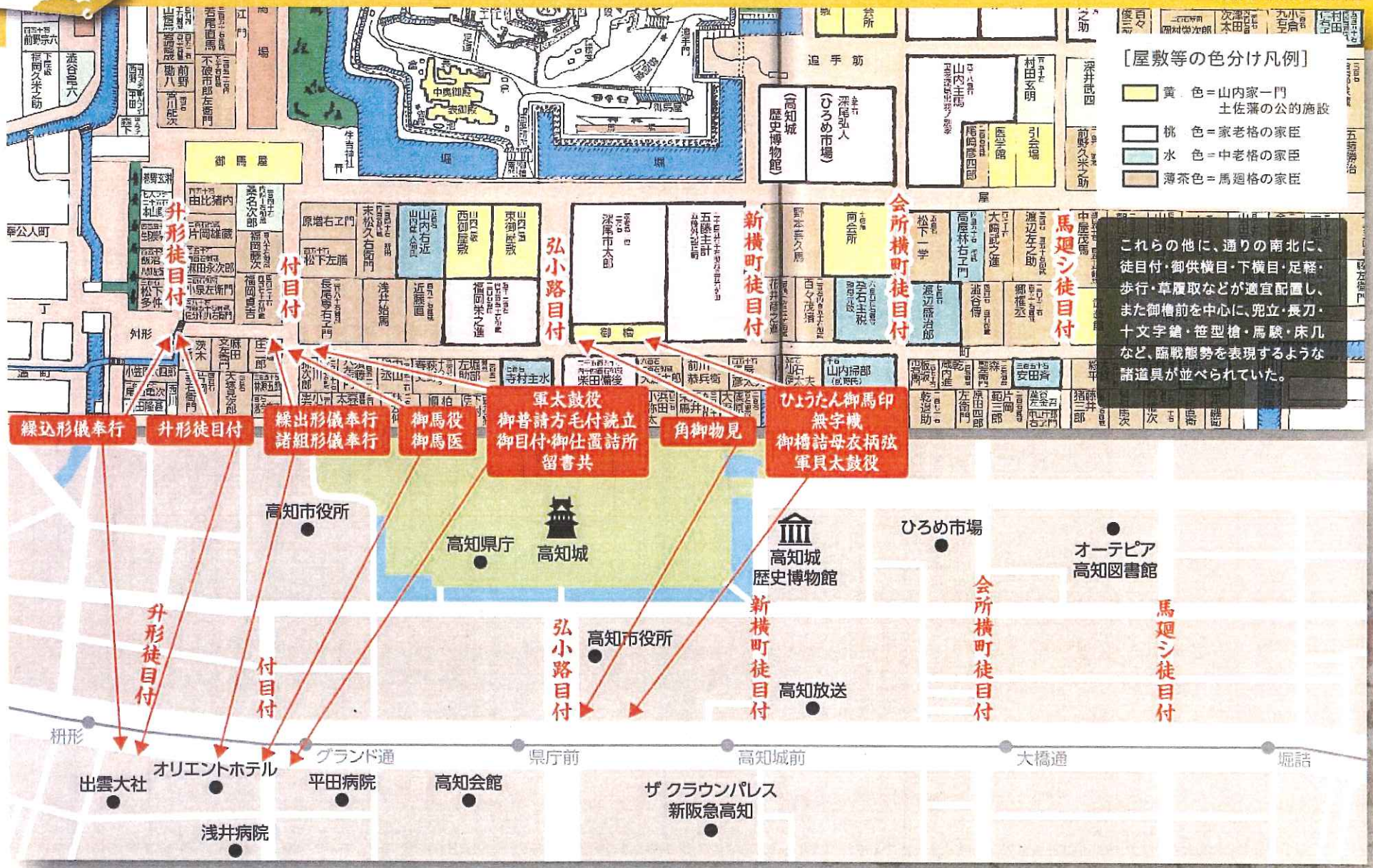
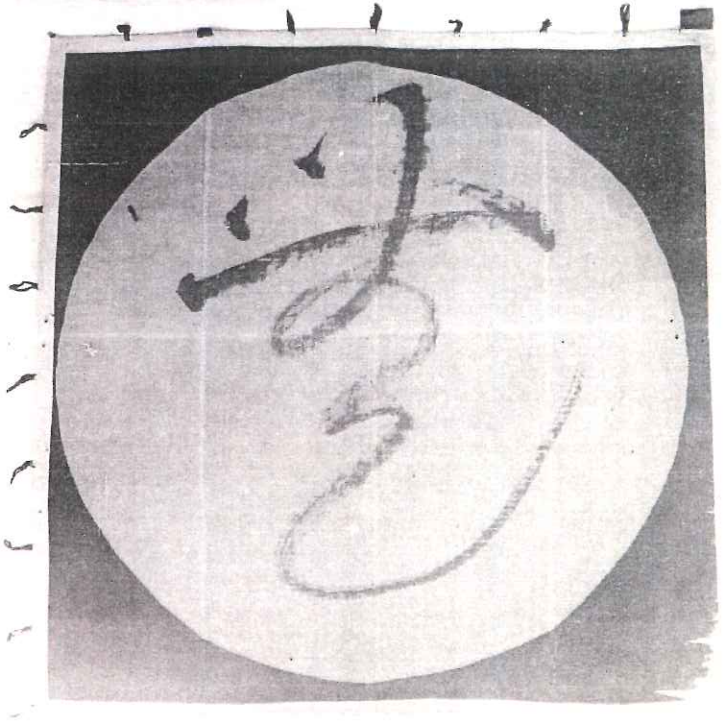
郭中の乗出（現在のグランド通交差点）には、「繰出形儀奉行」と「諸組形儀奉行」が詰めており、馬の様子を見る「御馬役・御馬医」も詰めていた。
繰出形儀奉行が手にする帳面には、疾走者の名前や順番などが書かれていたのであろう。


寛文9年（1669）
城下町図より
グランド通
大塚伊左門
山田重兵衛
藤谷
長屋内
藤原
田三
伊藤
松下権兵衛
松下
田楽
升形
本町
東
南
西
北
毛利久八屋敷
大野久左衛門屋敷
グランド通
交差点
大塚猪左衛門
やしき
担当諸役人
飯沼太郎衛門屋敷
長屋喜内
やしき
左一
山内彦作
物頭
同しふん
馬廻り
同しふん
与力
柴田覚大夫屋敷
小笠原
昆布
升形
松下源兵衛
やしき
左二
野中伝右衛門
物頭
同しふん
馬廻り頭
馬廻り
同しふん
与力
与力
同しふん
馬廻り
同しふん
物頭
百々刑部
右三
与力
同しふん
馬廻り頭
物頭
同しふん
深尾帯刀
右四

土佐藩の正月恒例行事

駆初（のりぞめ）役人配置図

毎年正月11日、郭中の本町筋（現在の電車通り）で、土佐藩の新年恒例行事「駆初」が挙行されました。当日は、升形から堀詰までの各所に、担当役人が配置され、行事の安全と円滑な進行を見守っていました。

武家の居住区、郭中を象徴する行事で、疾走する騎馬を藩主が閲兵するなど、藩主と家臣の関係を再確認する行事でもありました。

下図は『改訂版 高知城下町読本』（高知市、2004年）34・35頁掲載の幕末頃の高知郭中図